

空

平成十五年三月一日発行 一号



創
刊
号

2003年
SORA 創刊号

祝

柴田佐知子さんが新俳誌「空」を出すという。空のように広く大きな俳句への思いから名付けられたものである。存分の思いが伝わってくる。いい俳誌に育つかどうかは主宰の高さによって決まる。期待する所以である。

平成十五年二月吉日

伊藤 通明

創刊のことば

柴田 佐知子

木々の芽のふくらむ季節、ここに「空」は誕生いたしました。

俳句を作るということは、真摯な時を重ねていくことだと考えます。

この世で与えられた自分の時間を遥かに超え、時空をひろげ得る俳句への信頼をいよいよ深めております。

十五年前に高倉和子さんと始めた空句会に、ごく身近な友人たちが加わり、それぞれがのびやかに俳句と向き合ってまいりました。これからも仲間と在ることを楽しみながら、一人一人が自らの俳句を深めていく場でありたいと思っております。

晴夜 (1)

柴田 佐知子

切株を蹴つて鳥たつ冬霞

覗き込む火口が粉雪押し戻す

狐火を連れてきさうな女なり

角あれば必ず曲がる虎落笛

冬眠の山へ速達来りけり
窮屈な柩を思ふ霜夜かな
厚着の子つまみしやうな鼻つけて
押し合ひしまま鯛焼の冷えてをり
老いてなほ父の大足日脚伸ぶ
宙に出て軍鶏の弾ける鶏合せ
殺すほど愛してをらず林檎むく

―「俳壇」3月号より―

大粒の星出揃ひし飾り炭
幸せなマリアは知らず冬三つ星
水仙の束抱いて身の透けてきし
物申すごとく覗きし竜の玉
墳に齒も腕輪も残り大寒なり
あまた瀬を越えきし魚に木の芽張る
をりをりは阿蘇より高き山火かな

桜鯛百畳の間を進みけり
鳥あまた空に帰して牧ひらく
たんぽぽに牛がどすんとすわりたる
三月や洗ひあげたる小鳥籠
野遊びの万葉歌碑に折り返す
存分に遊びし夜の桜漬

自問

高倉 和子

地球儀の最果て青し日脚伸ぶ

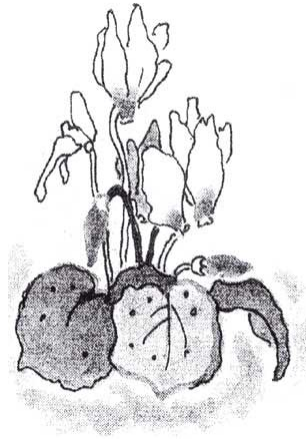
参道のどこも日当たる二月かな

盆地より出ぬ雲のあり雛祭

白魚の水に紛るる他はなし

手を伸ばす幹に水音夏に入る

自問自答に花氷細りけり



無疵

青山 悠

取り落とす玉の地響き玉せせり

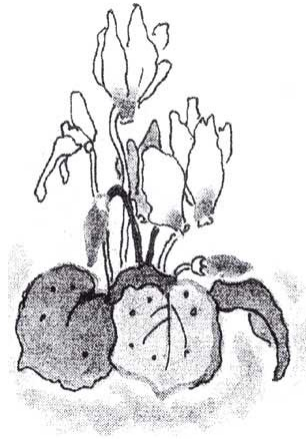
茜摘む雨の上がりし観世音

大寒の空の無疵を称へけり

探梅の通り抜けたる裏鬼門

朴齒下駄鳴らして二月礼者かな

芹咲いて赤く反りたる五条橋



楓の芽

秋 千晴

箒目の正しき寺や楓の芽

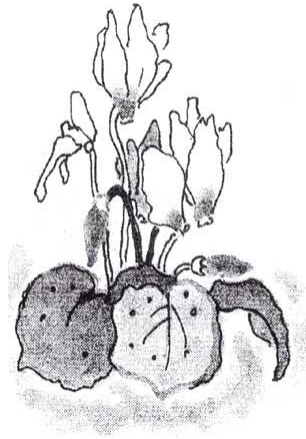
ふらここの山見上げたり見下ろしたり

紙風船折り目とがりて七色に

筍の十二単衣を脱がしけり

大阿蘇の道を消したる夕立かな

土産とて鮮桶のまま持ちくれし



荒灘

あさなが捷

手毬唄うたひて祖父の手を思ふ

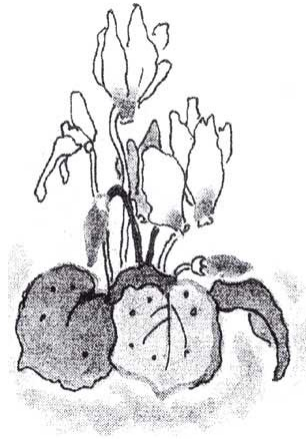
寒明けや大漁祝ふ海人のこゑ

風船の空に吸はれてしまひけり

尾を強く振りて集まる蝌蚪の群

間を置きて父の応ふる花の昼

荒灘を封じて祭神輿かな



モーゼ

小林 朱夏

冬日向母を呼びたくなりけり

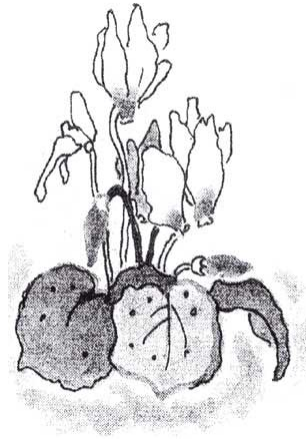
潮干狩大きな声の上がりたる

土筆立つ裾野の広くなりけり

乱れたる髪を収めし春帽子

唇を少しゆるめて春惜しむ

防波堤進むモーゼの白日傘



春の虹

十河 波津

神籬に日矢射しわたる斧始

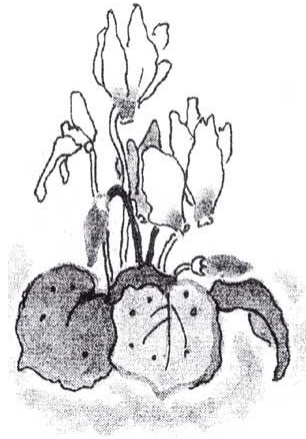
枇杷の花墳は農家の庭つづき

冬晴の南にひらく墳の口

墳に入る息の触れ合ふ寒の闇

古代の天人冴え冴えと雙手挙ぐ

子は神が見えてゐるらし春の虹



真劍

苑 実耶

あたたかや母唄ひきる数へ唄

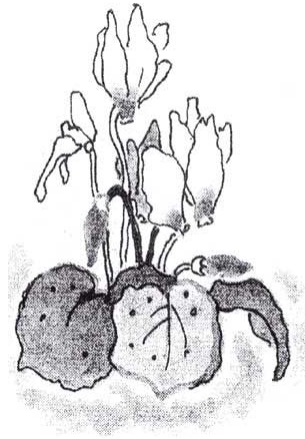
水温む民家は手打ち蕎麦の店

桃の花母を散歩に連れ出せり

宍道湖に舟繰り竿繰り蜆採る

見ることの叶はぬ父に桜狩る

真劍のきつさきに立つ博多独楽



手締め

高倉恵美子

矢車や代の替はりし大薨

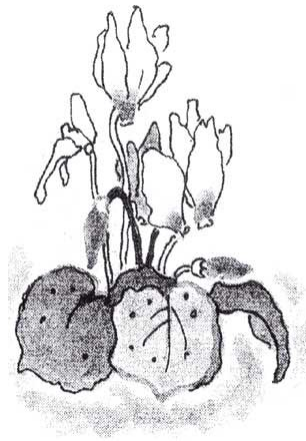
将棋さす子に夕立の過ぎにけり

七日子の固き拳や雲の峰

雨のあと声を高めしつくつくし

蓮の実を夜店に父と買ひしこと

大物の売れし手締めや植木市



春光

遠野 萌

打ちかへす波音高き飾海老

初凧や松をうごかぬ鳥のこゑ

輪飾の牛舎を雀出入りせり

日脚伸ぶ卒寿の母に紅さして

啓蟄の花舗に立ち寄る墨衣

あたたかや一樹に雀鳩からす

